

# 第1回京都府教育振興プラン改定に係る検討会議概要

## 1 日 時

令和2年1月22日（水）10時30分～12時30分

## 2 場 所

京都産業大学むすびわざ館3階 301教室

## 3 出席者

委員 青山委員、大野委員、岸本委員、佐藤委員、中山委員、原委員  
(欠席：村田委員)

府教委 橋本教育長、前川教育次長、山本教育監、西村管理部長、山口指導部長 他

## 4 内 容

京都府の教育をめぐる状況及び改定の大きな方向性について

次第 教育長あいさつ

委員及び出席者紹介（欠席の村田委員はビデオメッセージ）

座長等選出

事務局からの説明・質疑応答

- ・検討会議の進め方

- ・京都府の教育をめぐる状況（社会の動向・子どもの状況）

- ・プランに掲げる京都府の教育の基本理念及びプランに基づく取組状況

意見交換・協議

- ・改定の方向性

## 5 資 料

資料1 配席図

資料2 検討会議設置要綱

資料3 検討会議傍聴要領

資料4 検討委員御紹介

資料5 検討会議の進め方

資料6 京都府の教育をめぐる状況（社会の動向・子どもの状況）

資料7 プランに掲げる京都府の教育の基本理念及びプランに基づく取組状況

== 詳 細 ==

### ■教育長あいさつ

現在のプランは、平成18年の教育基本法の大幅改正により、都道府県や市町村が策定するよう定められた「教育振興基本計画」の京都府の第一期の計画にあたる。平成23年に、今後10年を展望する計画として、京都府の教育の基本理念や施策推進の視点などを掲げて策定したこのプランに基づき、京都の明日を担う人づくりを進めてきた。中間年の平成28年には、子どもの貧困問題やいじめ問題などの当時の課題も盛り込み、具体的な目標や施策を掲げる部分の見直しも行った。

しかしながら、現在、更なる人口減少とAIの急速な普及など、社会は10年前とは比べものにならないほど大きく変化しようとしている。様々な課題と向き合い、多様な教育のニーズに応え、誰もが安心して学べる環境づくりに引き続き努める一方で、今後も予測を上回るスピードで変動し、先を見通すことが難しくなる社会に対応できる力を子どもたちにはぐくむためには、どのような教育ビジョンを掲げるべきか。難しいテーマではあるが、教育の最前線・最先端で活躍されている委員の皆様に、知見や経験に基づく新しい切り口

やアイデアを、他方で、時代が変わっても変わることのない教育の基本理念などをお示しいただきたい。

京都府においては、昨年秋、西脇知事のもと新しい総合計画を策定しており、中でも「子育て環境日本一」を大きな目標として掲げている。子育て環境日本一の実現のためには、教育環境日本一が欠かせない要素となる。時代と社会の要請に応じた新しい京都府の教育を推進していくため、令和2年度中のプランの策定に向けて、これから1年間お世話になる。実り多い議論・検討ができるよう、よろしくお願い申し上げます。

## ■委員及び出席者紹介

委員の皆様を五十音順に紹介  
御欠席の村田委員からのビデオメッセージ

## ■座長等選出

検討会議設置要綱の第4条に基づき、座長に原委員を選出  
座長の指名により、座長の職務代理者として、大野委員を選出

## ■事務局からの説明（総務企画課長）

検討会議の進め方（資料5）  
京都府の教育をめぐる状況（資料6）  
プランに掲げる京都府の教育の基本理念及びプランに基づく取組状況（資料7）

## ■意見交換・協議（主な意見）

- 自分のことを周囲がしっかり理解してくれているということが、プランが大切にしてきた子どもたちの「包み込まれているという感覚」につながる。ICTなどの活用により、個々の教員が持つ情報を共有することが、「包み込まれているという感覚」にも通じる。
- きめ細かな指導や特別な支援を要する子どもたちへの対応のため、学校には多様な人材が入っている。しかし、非常勤講師などを増やすと、その分打合せの時間は増え、働き方改革と逆行する。ICTをいかに効率的に活用し、教職員の打合せや子どもたちの情報共有をより円滑にしていくかが非常に重要である。
- 専科指導も拡大していく。学年集会の打合せや職員会議なども、ICTを活用して事前に資料をやりとりしておけば、短時間の会議で済む。
- ICTについては、ハード面の整備はもちろん、働き方改革や子どもたちのためになる使い方ができるよう、教員のICT活用能力を高めるようなソフト面の環境整備も推進する必要がある。
- ICTの利活用については、「何の情報を吸い上げて共有すれば良いのか」ということも重要である。国家レベルで推進しているスウェーデンの取組なども参照し、どの観点で子どもたちを見て、そこからどのように情報を選択していくのかということももっと明確にして良い。
- 若いうちから海外経験を持つことは、社会に出てからとても役に立つ。留学までいかない1週間程度の経験であっても意義がある。
- 海外留学や留学生の受け入れなどの経験を通し、自分の将来を前向きにしっかりと考えられるようになるとともに、異文化理解も身につく。

- 海外の経験を含め、教職員が研修を受けたり自己啓発を行ったりすることの成果が子どもたちへどのように寄与するかという点にも目を配りながら、国際的な視野をもった子どもの育成について考えていく必要がある。
- どんな世の中になろうとしっかり生き抜いていく力が必要。今の子どもに感じるのは、「大人になりきれしていない」ということ。いろいろな意味で自立を果たせるようになってほしい。
- 注目すべきは形成する中層レベルの非認知能力。この部分がしっかり身につくと汎用性が高くなるので、先行きが見えない場合でも乗り越えていくことができる。中層レベルの非認知能力の重要性を発信していかなければならない。
- 今の子どもたちは大人しすぎる。小さい頃から「自分の意見を言う」「相手の意見を聞く」「中間点で折り合いをつける」という力をつけさせなければいけない。この力はICTを使ってなんとかできるものではない。
- 技術革新や教育手法の発展など様々な改革が進んでいるが、教育の質を向上させていくことに加え、多様な子どもたちが多様な学び方で教育を受けることが、未来に羽ばたいていくきっかけになる。
- 文科省のいう「個別最適化された教育」を特別な支援を必要とする子どもに届けるかという点も検討しなければならない。
- 良い先生との出会いがあれば、子どもも親も成長することができる。「どんな子どもでもどこかに扉はあり、私たちはその扉を一生懸命探している」という先生の言葉で、「包み込まれているという感覚」を実感し、様々なことに気づかせてもらった。
- 教員の働き方改革は子どものためになるもの。先生方が栄養いっぱい、元気いっぱいで、教師として誇りを持って働いていけるような改革を進めていただきたい。
- 先生が「笑顔」で子どもたちに何かを「発信」し、先生自身が学び続ける中で、“新しいことをやってみよう”とちょっとした「先進性」をもって声かけしていくことが良い状態なのではないか。
- 京都府の中学校は、過去に荒れていた時期もあったが、弁護士や臨床心理士等で構成する「学校支援チーム」が学校の中だけでは解決しにくい問題に対応するなど、現在はその効果が表れている。
- 教育現場は様々な課題が存在しており、現場の大変さも理解している。本来あるべき地域・社会における教育のあり方を考える時期に来ている。
- 社会教育の取組を子育て家庭にどう届け伝えていくかについても、しっかり考えていくべきである。
- 京都ならではの取組として大学の密度の高さを活かすことは非常に重要で、社会教育とも関連づけながら考えていかなければならない。

- 府教委はとても良い取組を行っており、それぞれの先生も非常に頑張って成果を出されているが、その情報が府民に共有されていないもどかしさを感じる。府教委や各学校のホームページをどのように活用していくかという議論も必要。
- ローカルテレビ局などに取組を取り上げてもらうなど、メディア戦略を進めてはどうか。現在は不祥事などが目立ち、印象が悪くなっている。良いことをもっと発信することで、先生自身もプライドを持つことができる。
- 現場にしっかり落とし込むためには現行プランの「10の重点目標」は多いと感じる。先進性のあるものを盛り込んでメリハリを付けるなど見せ方を工夫し、戦略性を出す必要がある。
- 現行プランの「基本理念」は平易な言葉で書かれており、誰にとってもわかりやすいものになっている。現行の内容から大きく変える必要はないが、ICTの利活用や特別な支援を必要とする子どもたちへの支援など、今の時代に合わせたカスタマイズを行う必要がある。
- 現行のプランは演繹的な構成になっているが、逆のベクトルで帰納的に結びつけていくのも面白い。
- 教育は時間がかかる一方で、社会の動きはとても速い。プラン自体がサステイナブルであるか、実現可能であるかが重要。掲げたものが実現できない計画は多い。優先順位をつけることもひとつの案。
- 単に10年持てばよいというものではなく、この先の京都を見据えた新規性のあるプランであるべき。
- 府教委として、未来を担う子どもにどのような教育を進めるのか整理し、プランに盛り込みたいキーワードなどを次回の検討会議で御呈示いただきたい。